

第3回 パチンコ・パチスロ エッセー・絵手紙コンクール

秋山瑞葉さんがエッセー最優秀

絵手紙部門は大串勇二さん

第3回パチンコ・パチスロエッセー・絵手紙コンクールの最終審査

最終審査委員会委員

(敬称略)

◆審査委員長

深谷 友尋 (日遊協会長)

◆協賛団体委員

青松 英和 (全日遊連理事長)

市原 高明 (日工組理事長)

里見 治 (日電協理事長)

中村 昌勇 (全商協会長)

伊豆 正則 (回胴遊協理事長)

古宮 重雄 (自工会理事長)

◆日遊協委員

庄司 孝輝 (広報調査委員会 担当副会長)

福山 裕治 (広報調査委員長)

◆事務局

篠原 弘志 (専務理事)

伊藤 慎吾 (常務理事)

審査委員会が5月15日、日遊協本部会議室で開かれた。第2次審査で残ったエッセー、絵手紙各13点の入賞作品を対象に審査した結果、最優秀賞にはエッセー部門が香川県多度津町、会社員 秋山瑞葉さん(21)、絵手紙部門が東京都杉並区、自営業 大串勇二さん(36)の作品にそれぞれ決まった。

この後両部門の優秀賞2点ずつ、佳作10点ずつも決定した。最終審査の結果は6月6日の日遊協ホームページで公表される。さらに、同月13日の日遊協第24回通常総会に最優秀賞受賞者2人が招かれ表彰される予定となっている。

「書くのが好き」

会社勤めのOL

入賞者

エッセー

◆最優秀賞 (1編：旅行券30万円分)

秋山 瑞葉 (21) (会社員) 香川県多度津町

「父と彼と私」

◆優秀賞 (2編：旅行券10万円分)

【日本遊技機工業組合優秀賞】

本間 一孝 (46) (会社員) 神奈川県川崎市

「大切なパチンコの思い出」

【日本電動式遊技機工業協同組合優秀賞】

栗原 淳也 (26) (自営業) 神奈川県秦野市

「ルールを作って」

◆佳作 (10編：商品券1万円分)

紺野 聡子 (39) (パート従業員) 岩手県盛岡市

荒田 正信 (59) (無職) 岩手県宮古市

石川 和紘 (23) (会社員) 埼玉県草加市

川北 弘美 (51) (パート従業員) 三重県名張市



業界の協賛団体の代表も加わり、エッセー・絵手紙コンクールの最終審査

エッセー最優秀賞の秋山さんは
設計会社に勤める21歳のOL。秋

山さんがつき合っている彼を父親
に紹介したとき、彼が「パチンコが

好き」といったせいから父親は取りつく島もない雰囲気。「よく思わないよな、パチンコが趣味なんて」としよげる彼だったが、実は父親もパチンコが好きで、後日2人は秋山さんが気づかないうちにこっそりと意気投合していた——といった成り行きが、ほほえましく描かれている。エッセーの投稿作品では、秋山さんのように身近な体験をさらっと書いた作品や、自分の人生とパチンコ・パチスロを重ね合わせてズシリとくる作品が多かった。

秋山さんは、「コンクールの募集はネットで知りました。文章を書くのが好きなので応募してみたら、最優秀賞といわれて驚いて、しばらく実感がありませんでした」。彼と違っ

絵手紙

- 高妻 秀樹 (57) (地方公務員) 宮崎県宮崎市
- 諏訪 真介 (32) (株)正栄プロジェクト
- 迫本 哲也 (37) (株)フローバ
- 萩森 純 (24) (株)安田屋
- 佐藤 宏樹 (24) (株)安田屋
- 永井 翔太 (22) (株)大一商会

- ◆最優秀賞 (1編：旅行券15万円分)
- 大串 勇二 (36) (自営業) 東京都杉並区

- ◆優秀賞 (2編：旅行券5万円分)
- 〔全国遊技機商業協同組合連合会優秀賞〕
- 佐間みどり (61) (会社員) 島根県吉賀町

- 〔回胴式遊技機商業協同組合優秀賞〕
- 伊藤 知沙 (29) (会社員) 東京都中野区

- ◆佳作 (10編：商品券1万円分)
- 金丸美志子 (65) (主婦) 三重県伊勢市
- 橋口 紀子 (24) (主婦) 兵庫県神戸市
- 瀬尾 千富 (65) (無職) 広島県福山市
- 松井加仁子 (40) (無職) 広島県府中町
- 鈴木 盛道 (58) (講師) 茨城県常陸太田市
- 長島 勝治 (70) (無職) 静岡県静岡市
- 真山 正太 (63) (自営業) 宮城県利府町
- 藤田 禅 (36) (株)日光商事
- 竹内 新史 (31) (株)日光商事
- 梶 美也 (20) (ひぐちグループ)

てパチンコをしたことがないという。彼が「パチンコ行ってくる」というと、「じゃ、行けば」といって送り出す。「パチンコに妬いているのかも知れません」という。



エッセー部門最優秀賞の秋山瑞葉さん

最優秀賞

父と彼と私

香川県多度津町・会社員
秋山瑞葉 21歳

「もうびっくり」 似顔絵が得意で

絵手紙最優秀賞の大串さんの作品は、デートの時間までの暇つぶしのつもりだったのに、そういうときに限って大フィーバー。もう止まってほしい、いやもつと続いてほしい——と混乱してパニックっている男性。「あるよなあ、こういうこと……」と、誰もが思い当たるシチュエーションを活写した。絵手紙の投稿作品では、1、2回目のコンクールで目立ったポスターデザイン的な作品が減り、絵も言葉も自分流でのびのび描いた絵手紙が増えた。

大串さんはふだんイベントなどで似顔絵を描いているので、描くことはお手の物だった。作品の発

娘さんをください、なんて仰々しい挨拶をしにきたわけじゃないのに、父の顔は険しかった。私の恋人は、蛇に睨まれた蛙のように身をすくめて

いる。事の発端は私の外泊が増えたせい。彼も私も旅行が好きなので、毎週末のように遠出をしていたのだ。もう大人だから構わないでしょ、と反論する私に、ならば交際している人をきちんと紹介しなさい、と父は言いつけた。

「君、趣味は何だ」
名前から年齢、職業までを取り調べのように聞いたあと、父は固い声で尋ねた。

「はい、釣りです」
実はこれは嘘。本当は大が付くほどのパチンコ好きだけれど、そんなこと言っちゃうと印象が悪いでしょう、と二人で事前に話し合ったのだ。父の趣味もパチンコで、それが母の愚痴の種だという話は置いておいて。

「本当か？」
父がギロリと恋人を睨む。彼はうろたえて、大きな声で、ごめんなさいっ！ と叫んだ。

「嘘をつきました！ 本当は、パチンコが好きなんです」
父は何も言わなかった。最後に厳しい表情で、しばらく外泊は控えなさい、と忠告され、訪問は

終わった。

「やっぱり良く思われないよな、パチンコが趣味だなんて」

帰り道、肩を落としてしよげる恋人を、そんなことないよ、と励ます。

「きつと嘘をついて、自分を良く見せようとしたことがだめだったんだよ。次会うときは、ありのままを見せようね」

映画を観にこうと予定していた日に、彼に急用が入った。掛かっていた電話に出た後、ごめんと頭を下げられる。

「楽しみにしていたのに。何の用事？」

聞いただけでも返ってくるのは謝罪ばかり。そのうえ着ていたパーカーを脱いで、ぱりつとしたシャツに着替えたりしている。これは怪しい。

「せめてどこに行くのかだけは教えなさいよ！」
彼は、泣き笑いのような、奇妙な表情を浮かべて小さく呟いた。

「……パチンコ」
恋人の部屋でふて寝をしていたら、彼が宝くじにでも当たったかのように晴れやかな顔で帰宅した。

「彼女を放置して打つパチンコは楽しかった？」
嫌みったらしくそう聞くと、彼は笑って首を振った。

想は自らの経験からで、「友達との待ち合わせや仕事の合間の空き時間にパチンコをすると、ときどきああいう事態になります」。コンクールの募集はネットで知った。パチンコが好きなので、「入選でもすればいいな」と気楽に応募したら、最優秀賞と知らされて、「もう、びっくりしました」。ちなみに、もっぱら1円パチンコのファンだとか。

今回のテーマはエッセー、絵手紙共通で「パチンコ・パチスロ私の楽しみ方」「パチンコ・パチスロへのメッセージ」の2つ。「一般」と「業界」に分けて募集した。応募数はエッセー457点（一般239、業界218）、絵手紙332点（一般113、業界219）、計789点（一般352、業界437）。前回より126点（エッセー50点、絵手紙76点）増加した。

コンクールは日遊協が主催し、全日遊連、日工組、日電協、全商協、回胴遊商、自工会が協賛、最終審査委員会委員には日遊協関係者のほかに協賛団体の代表者が名を連ねた。

「お義父さんに、許してもらえたよ」

頭の中にたくさんのハテナが浮かぶ。間抜け顔の私の隣に腰掛け、彼はさつきまで父と一緒にパチンコ屋さんにいたのだと説明した。

「今朝の電話、お義父さんからだったんだよ。あいつに話すと心配してついてきてしまうだろうから、一人で来てくれて言われてさ。映画、行けなくてごめんね」

私は首を振り、続きを促した。

「駅で待ち合わせしていたんだけど、どこに行くのかと思えばパチンコ。お義父さんが何も言わずに打ち出したから、俺も隣に座ってさ。しばらく無言で打ち続けたよ。あの時ほどパチンコ屋の喧騒をありがたと思ったことはないね」

仏頂面の中年の男と、その男の娘の恋人が、気まぐすそうに肩を並べてパチンコ台に向っている。想像すると吹き出してしまいそうな光景だ。

「お義父さんは調子良かったけど、俺はさっぱりでさ。お義父さん、やっと俺の方向いてくれて言ったんだよ。そんなんじゃ勝てないぞ。次はどこへ行く予定なんだって？」

来月、長崎へ行こうと計画を立てていた。お義父さんに禁止されたばかりだし、と彼は渋ったが、私が駄々をこねたのだ。彼が、「九州へ」とびくびくしながら答えると、父は大きく頷いたという。

「長崎だろう。あいつが昔、軍艦島に行きたいと言っていた」

そしてなんと、父は彼に礼を言ったそうさ。

「俺は仕事にかまけていて、しばらく旅行も連れて行ってやれなかった。ありがとう」

それから初めて笑顔を見せて、彼の肩を小突いたらしい。

「旅行もいいが、たまには真っ直ぐ家に帰ってこいと、あいつに伝えてくれ。母さんが寂しがら」

帰り際、父はその日の戦果を彼に渡した。

「長崎で、旨い物でも食ってくれ。うちのカミさんはこれをやっておけば機嫌がいいから」

そう言って、景品のキャラメル箱を振り、父は帰って行ったという。

「そうそう、あいつはこれが好物だからって、お義父さんが……」

彼がポケットから取り出したのは小袋のラムネ。蓋を開けて一粒口に含むと、懐かしい味が広がった。小さい頃、父が母に内緒でくれるこの駄菓子が好きだったのだ。成人しても恋人ができて、お父さんにとって私はいつまでも子どもなのだ。そう思うと、感謝と反省で目頭が熱くなった。

父がくれた戦果は、使わずにしまっている。九州から帰ると、彼を連れて父母と食事をしようとして計画しているからだ。パチンコ談義に花を咲かせる男達と、それを呆れながら見守る母娘。そんな幸せな風景は、パチンコが繋げてくれたのかもしれない。そう考えると、パチンコのネオンに、ありがとうと伝えたくなる。それに、休日に申し訳なさそうにパチンコ屋さんへ向う彼の背中を、温かく見送れる気もするのだ。



最優秀賞



絵手紙部門最優秀賞の
大串勇二さん

優秀賞

伊藤知沙さん



優秀賞

佐間みどりさん

